

令和3年度 「ふくしまの未来」へつなぐ体験応援事業

高校生が書き残す 地域と厄災の記憶

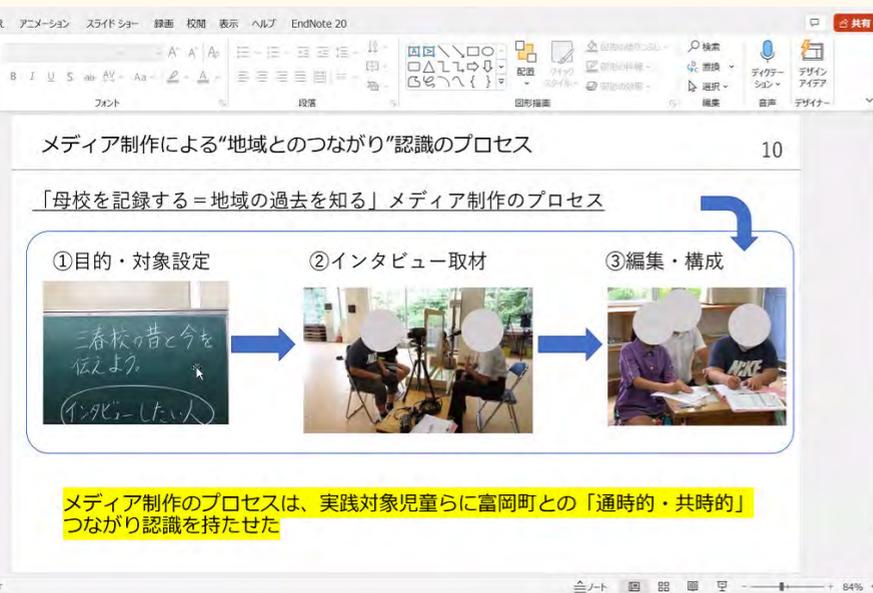
～白河・双葉・広島を記憶でつなぐ～
パンフレット



裏庭
Uranawa

03 主な取材・研修活動一覧

- 8月28日 双葉郡内取材（東日本大地震・原子力災害伝承館伝承館訪問見学、AFW 吉川彰弘さんと双葉駅～県立双葉高校周辺散策、浪江町 bar 幸訪問）
- 9月12日 白河市内取材（大堀相馬焼 いかりや窯 山田慎一さん）
- 12月15日 事前研修（ヴォイス・オブ・フクシマ 久保田彩乃さん）
- 12月18日 広島市内交流（広島平和記念資料館、social book café ハチドリ舎）
- 12月19日 大崎上島町交流（ミカタカフェ、ゲストハウス庭火）
- 12月20日 大崎上島町交流（広島県立大崎海星高校、大崎上島観光協会、岩崎農園訪問）
- ...取材・交流活動の合間に編集・執筆作業を行いました。
- ...一部の研修は感染防止対策のためオンラインで行いました。下の写真は12月15の様子です。



01 活動概要

白河市にあるコミュニティ・カフェ EMANON を拠点に活動する高校生ライターが所属する地域情報発信チーム「裏庭編集部」。2021年度のテーマは「高校生が書き残す地域と厄災の記憶～白河・双葉・広島を記憶でつなぐ～」です。



! 白河市と東日本大震災

2011年3月11日に発生。日本観測史上最大のマグニチュード9.0の揺れが、東日本の沿岸地域を中心に未曾有の被害をもたらしました。白河市では、震度6強の揺れによる土砂災害などで、葉ノ木平地区で13名、萱根地区で1名、大信隈戸地区で1名がなくなりました。双葉郡にある福島第一原子力発電所の事故由来の放射性物質による環境汚染、それに伴う風評被害の影響も受けました。

02 高校生メンバー紹介



- 大崎上島のとりかまさん
- 大原日和 (白河高) バド部所属のスポーツ好き。苦手な食べ物は特に無し！
- 穂積英里奈 (白河旭) 旅が大好き。白河本町映えさせ隊発起人
- 辺見透子 (白河旭) よく黒魔術を使っていそうと言われるが使ったことはない。世界征服を企んでいる。
- 田上育樹 (白河旭) 読書が好きな高校2年生。好きな作家は香月日輪と奈須きのこ。
- EMANONのあと
- 有賀詩 (白河高) 広島にはいけなかったけど相馬焼が好き！
- 齋須撞真 (白河旭) 旭高校でjrc委員会として活動をしています

双葉郡取材

東日本大震災・原子力災害伝承館
双葉駅立～双葉高校
Bar 幸



双葉郡双葉町を訪問して

2021年8月28日、私達は福島第一原子力発電所がある双葉郡を訪れた。生い茂る草木、沢山のバリケードが張り巡らされている、人が住んでいない町。まるでモノクロの世界のようだ。

最初に東日本大震災・原子力災害伝承館に行った。この施設は福島第一原子力発電所から北3kmの地にある。双葉の震災前、震災後、そして、これから、を知ることが出来る。そこで目に入ったのは、当時小中学生だった子どもたちの作品だ。「原子力の利用」という習字課題、原子力発電に関する作文。その内容は「原発は最新の技術を使って電気を作っている。」「原子力は安全だ。」など、原子力を肯定的に捉えているものだった。震災が起こる前、原子力は双葉郡にとって身近な存在で、誇らしいものだった。そして、子どもたちには「原子力は安全だ」と教えられてきた。何故「原子力は安全だ」と言い切れていたのか。それは単純なことだ。東日本大震災が起こるまで事故が起こらなかったからである。原発の建設が決定した当時は一部の住民によって反対運動が起こった。しかし、多くの住民は原発の建設を大いに喜び、町の発展を期待したそうだ。私はこのことが衝撃的だった。震災が起きた当時小学一年生だった私は、原子力の存在すら知らなかった。事故が起こってからその存在を知り、危険だと教えられた。私は震災後の原発しか知らないの、震災前の原発の存在というものは新鮮だった。

続いてJR双葉駅周辺を散策した。2020年から、双



答えを出すことができなかった

お昼を「くろさか」という浪江町にある海鮮のお店で食べた後、元東電の社員で実際にこの街の住人としてここで暮らしていた吉川彰浩さんに案内をしていただき、いよいよ双葉町の地面を踏むことになりました。双葉町は帰還困難区域に指定されているので、住民でさえ寝泊まりすることが許されていません。さっきも書いたように

私は人が既に生活していると思っていたので、人のない予想外の風景に唖然としたのと同時に、吉川さんの話すここにあった思い出にとても興味を持ちました。

双葉駅前を散策したのち、山本幸輝さんが営んでいる「Bar 幸」では山本さんのお話をお洒落なカフェオレを頂きながらお聞きしました。その話の中に「自分の居場所を自分で作る」という言葉がありました。私はその言葉の力強さに追いつけず、呆気に取られてしまいもつと話が聞きたいと思いました。

私は今回、一番頭に残っている言葉があります。それは吉川さんの「双葉町は避難を解除するべきだったのか」という問いです。私はその時に答えを出すことができませんでした。それは今でも同じで、あの後色々調べたり避難者の声を見てみたりしてもまだ答えを出すことが出来ていません。なので私はこれからもこの問いについて考えて、いつか自分なりの理由を持って答えを出したいと思います。

(田上育樹)



私たちが出来ることは現地に行き、正しい情報を伝えることが大切だと思った。(辺見)



浪江町「bar 幸」にて

葉町周辺は避難指示が解除され一時帰宅が可能になった。しかし、元の住民であっても宿泊は出来ず、午後5時には避難先に帰らなくてはならない。完全に居住が出来ないので泥棒が侵入しないよう、常にパトロールカーが巡回している。人とすれ違う回数よりもパトロールカーとすれ違う回数の方が多かった。

そんな中で私たちは福島県立双葉高校へ向かった。震災が起こる前、双葉高校の硬式野球部は甲子園へ出場する程強かった。しかし、原発事故により避難区域に指定され、今は生徒を募集していない。かつて野球部が練習をしていたグラウンドは雑草に埋め尽くされていた。生徒達の賑やかな声も聞こえる訳がなく、ただただ時間が過ぎていくだけだった。(辺見透子)



福島県立双葉高校の校舎です。昇降口の学名が書かれたプレートが綺麗だったのとは裏腹に、その校庭は雑草で埋まっていた事故から流れた時間の長さを物語っているようでした。(田上)



広島市交流

広島平和記念資料館
social book café ハチドリ舎



人と人、人と社会、広島と世界をつなげる

【social book café ハチドリ舎】店主・安彦恵里香さん
ピースボートへの乗船経験などで、世界・日本には山の課題があることを実感。社会の課題が解決しないのは「知らない」ということが原因であり、それらについて学ばなければいけないと考えた安彦さん。今の日本では、政治や社会で起こる様々な問題について話すということが何となく話づらい空気が満ちていると感じていたため、自由に話せる場所、社会課題の解決に紐づく場をつくりたいと思い、ハチドリ舎をつくりました。

【ハチドリ舎について】

- ・政治や社会問題に関する本が揃っている。
- ・お話や映画上映など、色々な社会問題をテーマにしたイベントが次に30回ほど開催されている。
- ・集った人が「話す」場と、話すためのベースとなる「学び」を提供している。
- ・内装も机も椅子もクッションも本棚もカップも、全て手作り、「自分たちの手で作る」ことを大切にしている。

【ハチドリ舎で私を感じたこと】

私は、ふだん政治や社会問題について話す機会が少ないので、政治や社会問題に対して、ニュースではよく耳にするけど、どこか遠い場所で起きている難しそうな話、というイメージがありました。

ハチドリ舎には、社会の課題に気づくきっかけとなりそうな本やイベントが沢山あるので、それらを通して、社会の課題を身近に感じ、自分事として考えることができそうだと思います。

ハチドリ舎に訪れたのは初めてでしたが、居心地が良く、とても話しやすい雰囲気でした。ハチドリ舎での交流の後半にお悩み相談会が始まり、普段あまり話さないような自分のちょっとした悩みを話しました。

その日初めて訪れた場所で、初めて会った人に悩みを話している自分に驚きました。(大原日和)



大崎上島交流

大崎上島を案内して下さった「まなびのみなど」の皆様
ミカタカフェでの交流



大崎上島と大崎海星高校について

今回私たちが訪れた大崎上島は広島県から南の瀬戸内海にある面積約43平方キロメートルの島です（白河市は約955平方キロメートル）。この島はもともと造船業が盛んだったのですが、産業の衰退に伴って人口減少が進み、現在では3万人程度いた人口が半分以下になってしまっています。

私たちは、「まなびのみなど」の取釜宏行さん・円光歩さん・勝瀬祐介たちに島を案内していただきました。取釜さんはさすが地元の人といったように上島についてたくさん知っていました。「まなびのみなど」の皆さんは、私たちが交流した大崎海星高校にも、地域探究コーディネーターとしてかかわっており、地域振興等にも力を入れていらっしゃいます。私たちが上島について初日は、島を回りながら、ミカタカフェという場所で大崎海星高校の生徒と交流を行いました。島を回っている途中にも、地域に大きなスパーがほぼ一軒しかないや、フェリーなどでの移動が当たり前になっている、など白河と違う点もたくさんありとても面白かったです。

【大崎海星高校】

大崎上島には2つの高校があり、今回は大崎海星高校の生徒の方たちと交流をしました。大崎海星高校は、「地域未来留学」というプロジェクトに参加しており、このプロジェクトは自分の地域以外の高校に3年間実際に留学をし、自ら行動をする人や、留学先の地域の活性化などを目的に行われています。

す。大崎海星高校は、この地域未来留学の留学生を毎年10名ほど募集しており、県外の生徒が多く留学していること、また、地域と強く結びついていることが特色です。今回特に深く交流した生徒3名全員が、この地域未来留学で、京都などから大崎海星高校にやってきた生徒でした。

そしてこの大崎上島では、權伝馬という伝統行事が行われています。その内容は、全長12メートルの船に、18人のそれぞれ役割の持った船員が乗り、大崎上島から宮島まで船をこいで帰ってくる、という内容です。この行事は江戸時代末期の記録に残っているのですが、なんと200年以上の歴史がある行事です。大崎海星高校でもこの行事を行っていて、地域の人に權伝馬を寄付してもらい、実際に權伝馬をおこなっています。しかし最近では、コロナ禍のため宮島まで実際に行く事が出来ず大崎上島を、一周するという内容に変わりました。このコロナ禍で行えなくなってしまう伝統行事はたくさんありましたが、この状況でも行事の内容を変更し伝統を守り、それを続けている、ということも素晴らしいと思いました。（斎須 撞真）



誰もが誰かのミカタになれる場所！

【ミカタカフェ】大崎上島町
「誰もが誰かのミカタになれる場所」
オープン：.

2021年9月、コミュニティスペース
2021年11月、カフェ

運営：

高校魅力化プロジェクトのスタッフ
大崎海星高校の生徒

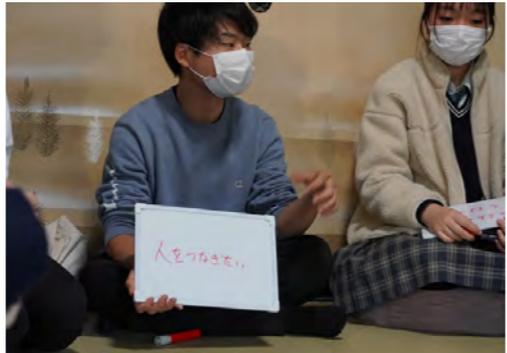
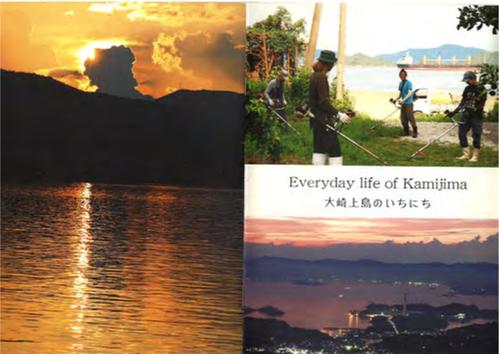
〈ミカタカフェを作るまでの流れ・想い〉

どこか学校とは別の場所、島の子ども同士、子どもと大人がつながれる場所があったらいいね、という会話がきっかけとなり立ち上げが始まりました。

子どもたちが学校の中では出会わないような人と出会う場所、地域の人とふらっと立ち寄りやってみよう、と気軽に話せるような場所であることで、そこで人と人とのつながりができ、新たな気づきや挑戦が生まれる、というようなコミュニティスペースを目指し、ミカタカフェができました。

〈ミカタカフェについて〉

学生が気軽に立ち寄れる学習スペースがあり、学校を越えた放課後・休日の居場所づくりを行っています。地域住民と子ども達の交流拠点となるように、地域コミュニティに開けたカフェ（コミュニティスペース）として、多種多様な出会いの場を創出しています。（大原）



（左上）大崎海星高校生のおはくんがつくった写真フリーペーパー（右上）双葉郡・白河市の取材活動について紹介（中左）高校生がいられてくれたドリンク（中右）みんなで集合写真（左下）ワークショップ形式で地域活動について対話（右下）みんなの目標を交歓

大崎上島交流

大崎上島観光協会
岩崎農園
島内散策



【訪問記】自分の軸に沿って、自分の意思で活動する高校生にあふれる島！

2021年12月19日、私たちは広島県の瀬戸内海にある大崎上島に渡った。大崎上島とは面積約43km²で人口約7000人の島である。

この日、私たちはミカタカフェという地域コミュニティの集まる場所へ行った。私はそこで出会った大崎上島の高校生である、古岡未来さん、服部匠さんについて紹介したいと思う。

古岡さんは大崎海星高校の一年生だ。彼女は大人から海星高校へ入学するためにこの島へ移住し、今は一人暮らしをしているそうだ。彼女は高校でカレー作りのプロジェクトを行なっている。他の島から物々交換で要らない野菜などの具材を集めてカレーを作るそうだ。この活動をするにあたって、先生に「その企画面白いね」と言われたことが印象に残っているそうだ。現代ではフードロスが問題となっている。特に日本では深刻で、平均して1人が1日に一杯のご飯茶碗の食料を廃棄している。その中で廃棄の野菜を貰って調理することによって少しでもフードロスを削減できる。この企画は社会問題と楽しいイベントを工夫して合わせていて素晴らしいと思う。

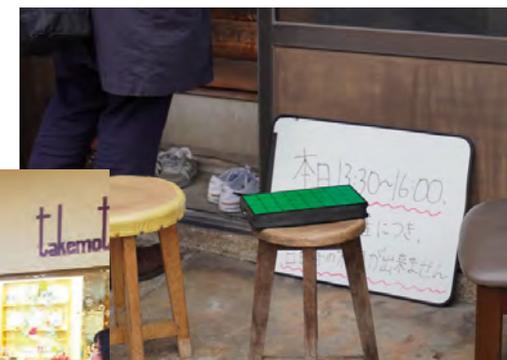
続いて、服部さんについて紹介したい。彼は大崎海星高校の二年生で生徒会長であり、関西方面から島へ移住している。一年生の時に初めて島に来て色々戸惑うことがあり、それを次の一年生に経験させないよう、人と人を繋ぐことを目標としている。

海星高校は全国募集をしているのだが、島が地元の人

が入学することが減少している。島の若者は都会を求めて島を出ていってしまう。元々全国募集を始めたきっかけは地元の高校生が様々な人と関われるようにたという事なのに、それが今となっては逆効果となってしまっている。

少子化によって地方の学校では少人数での授業を余儀なくされている。それによって濃い人間関係を築いてしまい、より沢山の人の関わる機会が失われてしまう。また、海星高校は少人数の学校であるのにも関わらず、学校内での関係が希薄である。そのようなことから服部さんは人と人を繋ぐことを目標としているそうだ。

私から見ると、海星高校の方は大人に教わられたレールに沿って活動するのではなく、自分からやりたいことを見つけて、その軸に沿って自分の意思で活動していることがよくわかる。そして、みんなが何かしらに熱い思いを持って活動していることに心を動かされた。(田上育樹)



(左上) 大崎海星高校生がミカタカフェでコーヒーを入れてくれる (中央) 大崎上島観光協会でお話を伺う (右上) 大崎海星高校には、探究に関連した展示資料がたくさん

(メイン) 岩崎農園さんで、特産品のレモン生産・加工についてお話を伺う (左上) 瀬戸内海を臨む展望台から島々をみる (中央) 空き店舗でガラクタ市の取り組みをしており、見学させていただいた (右上) ミカタカフェの軒先 (左下) 徳盛食堂のラーメン (右下) ビーチで散策

後日談 ...

お土産にいただいたレモンを白河のカフェに贈呈。
コラボメニューのレモンケーキにしました！



🏠 Uraniwa.jp
🐦 @Uraniwa_fks

裏庭編集部とは？

コミュニティ・カフェ EMANON を拠点に活動する福島白河の情報を取材・発信するローカルメディア。現役高校生から大学生が所属。滋賀県立彦根東高校新聞部との交流をきっかけに2015年発足。名前の由来は、社会学の用語 Not In My Backyard (NIMBY) から。裏庭にあって欲しいものも、なくて欲しいものも、正面から向き合って伝えよう！との想いを込めて。

令和3年度

「ふくしまの未来」へつなぐ体験応援事業
高校生が書き残す地域と厄災の記憶
～白河・双葉・広島を記憶でつなぐ～
パンフレット

[発行日] 2022年1月20日

[発行人] 裏庭編集部

(一般社団法人 未来の準備室内)

uraniwa.jp

[印刷所] 堀川印刷所